

「“縁分” ～中国人が教えてくれたこと～」

赤松咲

8月25日、山西大学のある太原市まで大連経由でいざ出発！これから始まる留学生活への期待に胸が高鳴っていた。だが早速、成田空港で荷物が重量オーバーし、また経由先でその荷物を忘れ、トランジェットが間に合うかヒヤヒヤし、挙げ句の果てに二時間飛行機が遅延し、初日はヘトヘトだった。色々ハプニングはあったが、太原に無事到着し、山西大学の方々が迎えにきて下さった。大半の留学生は9月初頭に寮に集まるため、早めにきた私は少し心細く感じた。こちらに来て3日間ほどは友人ができず、心細かったが、段々と寮に留学生が集まり、友人と出かけるようになるとそんな気持ちもどこかへいってしまった。中国に来て一週間、辛かったことは中国語が聞き取れないこと。寮での共通語は英語だが、外に出ればもちろん皆中国語を話し、何かを尋ねても、レスポンスが聞き取れなければ意味がない。自分の言いたいことは伝えられても、聞き取れなければ会話にならない。私が悩んでいると寮の他の留学生が声をかけてくれ、みんな親切で様々なアドバイスをくれた。例えば、イエメン人（サウジアラビアの下の国）、彼は大学院生で、始めは中国語がチンプンカンプンだった。そんな彼は今ではとても流暢に中国語を話す。その秘訣は、沢山聴くこと。テレビをつけたり、あとは中国人と沢山話すことが重要だそうだ。授業が同じアメリカ人、彼女はアメリカの大学で英語を教えているが、彼女も同じく中国人と沢山はなすことが重要だと教えてくれた。そんな訳で最近、テレビで昼ドラをみたり、ディクテーションを欠かさずやっている。

先日、食堂で出会った中国人の女の子と仲良くなり、彼女の寮に誘われお邪魔させていただくことになった。中国の大学の寮は一つの部屋に約八人が一緒に集まり暮らしている。寮の造りは簡素ではあるが、寮費が安いので、地方から来た学生や収入の少ない家庭の学生にとってありがたいようだ。始め彼女の寮を訪れた時、正直びっくりした。このような狭い空間に八人も！トイレもこんなに汚いし、仕切りさえもあるのだから無いのだから分からない状態。そして、女子も男子も毎日お風呂に入れるわけではなく、お湯を桶に注いで髪や頭を拭く。私は、毎日シャワーを浴びることができるし、部屋も一人部屋。彼らに比べて、私は恵まれた環境で勉学に励むことができる。部屋が狭いから、風呂に毎日入れないから、彼女たちは暗くてイライラしているかということと全く違

う。寮のみんなは明るくフレンドリー。一晩お邪魔させて頂いたが、この空間にはまるでひとつの家庭があるようだった。ここにいたら、悩み事なんて忘れてしまうだろうと感じた。何故なら、彼女達は仲良しで笑い合い触れ合い、何より幸福そうに見える。それは好きなものが手に入る幸福、つまりお金があって好きな事、好きな場所に行けるといような価値観での幸福ではない。彼女達の笑顔は決してお金で買える物ではない。日本人の留学生が来たということが一瞬にして寮中に広まり、他の部屋のひとたちまで私がいる部屋に集まってきた。私の中国名は赤松笑（咲）(chi song xiao) で、名の xiao（シアオ）は字の通り「笑う」を意味し、彼女たちは私のことを笑（シアオ）と呼んだ。皆、AKB や日本のアニメや中国語についてなど、色々なことを私に話した。フレンドリーで敵対意識など一切なく、みんな笑顔で接してくれる。確かに一人部屋のほうが面倒ではないし、好きなときに人のことを気にせず好きなことができる。だが、八人で寝泊まり共同生活しているその寮には経験したことがない温かさがあつた。それは日本の高度成長期以前の人々の付き合い方のような、かつて日本にもあつた、けれど今はもう失われてしまった人々の温かさみたいなものである。家族というコミュニティとは別の居心地の良いコミュニティで生まれる笑顔。中国人の友達は、私が心地よく過ごすために、様々な事にこまめに気を遣ってくれた。熱くないか、お腹はすいていないか、朝に髪をとかすときはこのブラシを使うといい、疲れてないか、この上着はきれいに洗濯してあるから使ってくれ、このお菓子はよく私の母親がくれた美味しいやつだからあなたにあげる、とか。そんなに気を遣わなくても大丈夫だよ、と言ったら、「そうしたいのだ。笑（シアオ）は私たちの友達なのだから。」と応え、そして、彼女は

「这是缘分。」と言った。「缘分」は日本語の「縁」にあたる言葉。彼女は、これも何かの縁だから、と言ったのだ。中国人は、一人の人間を一点にそこから円心状に人間の輪が出来上がっていく、という。「中国ではコネがすべて。」とよく言われるが、その言葉の通り彼らは人とのつながりをとても大事にする。太原にきてまだ二週間ほどだが私の中国人の印象は、“人の世話をやくのが大好き”、“細かい事は気にしない”。彼らは言いたい事があつたら遠慮なく言うのが礼儀であると思っている。そしてそんな彼らは人間的な温かさであふれている。それは人間関係が面倒で人がそれぞれ気を遣っている、という意味ではなく、それぞれさっぱりしていて、けれど人と人をつなげているものは寸胴のように

重く、がっしりと安定している。大学は一つの街の様に大きい、どんなに広くとも分厚い城壁で周縁を囲まれている。このような建築様式が人々の心を反映しているかのようだ、と私は思う。一見、一つ一つはバラバラしているようだが、彼らは見えない囲いでしっかりと彼らの関係を築いている。日本での人間関係は以上のような中国的なところを含みつつも、その場でその場で変わっていくような、滅びつつ創られていくような、またそれが美しいという価値観の中で築かれていると思う。

何もかもスケールがでかい中国にいと、細かいことがどうでもよくなってくる。日本にいたとき悩んでいたことが、すべてくだらなくなってくる。今までの自分が小さい人間に思えてくる。もっと物事を広く大きく考えようと思った。中国にいとそうなるか、また私が寮で様々な国の人々の考えに触れているからそのように思うようになったのかは分からないが、確かに言えるのは、些細なことではなく広く大きなことに神経を使おうと思うようになった。中国はとても広く、大きい。どこまで歩いても、決して飽きることはないだろう。それくらいのスケールの国。その中で、ぽつんと私が一人、何か細かいこと、どうでもいいような些細な事で悩んだり、気にしたりしているととてもくだらない事のように思えてくる。もし悩んでいるのなら、そこらの知らない人間に相談してもこの街の人間は応えてくれるだろう。決して面倒くさがることなく、応えてくれるだろう。だがこれは、中国の全ての場所でそうかという違和感がする。私は以前上海に行ったことがあるが、太原とは人々の性格が全体的に違う。中国は北方南方とで性格が大まかに違うようだ。友人から聞いたのだが、北方の人々は政府、つまり中国共産党寄りの人が多いらしい。が、これは字義通りの意味でとらえるべきではないし、本当にその意味を理解するならば、肌で感じるしかないと思う。私が中国にきて間もないころ、日本人の友人に北方南方の性格の違いとその中国共産党寄りのものは何か、と尋ねたところ、「それは一概に言えないし、しかも言葉にすることはとても難しい。実際、肌で触れないと分からないと思う。」と言われた。彼は私以上に中国について多くを知っており、経験も豊富な為、私はその言葉の意味にとっても興味ひかれた。こちらにきてまだ二週間ほどだが、何となくその言葉が意味するものに少し触れることができたのではないかと思う。それは、先ほど述べたような失われた何か、高度成長期以前にあった何かにつながる部分があると思う。

これから中国で一年間、様々な経験と出会いが待ち望んでいると思うと胸

がどきどきする。あらゆる新しいもの、私が今まで知らなかった何かとの触れ合いや「縁分」が私を今までいた場所とはまた別の場所へと導いてくれるだろう。そのような機会を逃さないように、日々努力をし、時を大事にしたいと思う。

2014/09/08

